様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０７０３７

研究課題名（和文）積雪寒冷地における地域在住高齢者の閉じこもり要因と支援

研究課題名（英文）The homebound factors and supports among older residents of a cold snowy region

研究代表者
原田　圭子（Harada, Keiko）

高知県立大学・看護学部・助教

研究者番号：２０８０６０６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は，積雪寒冷地在住高齢者の閉じこもりに焦点を当て，積雪期と非積雪期における外出目的別の頻度および外出に対する楽しみの程度と，外出に対する自己効力感との関係を明らかにした．2時期それぞれに郵送法による質問紙調査を行った．外出に対する自己効力感を高める外出目的は，頻度では2時期とも「日用品の買い物」，積雪期のみ「友人・知人と会う」「散歩・運動」であった．楽しみの程度では積雪期のみで，「受診」「役所・金融機関」「地域での役割」「除雪」であった．
　積雪寒冷地在住高齢者の外出に対する自己効力感を高める要素は，積雪期に外出の楽しみを見出すことであることであると示唆された．

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果の学術的意義は，積雪寒冷地において高齢者の閉じこもりを予防するために，気候の違いに着目して外出の頻度と楽しみ度の実態を明らかにしたことである．対象者の生活環境に応じて，看護専門職としてどこに働きかけることができるかについて示唆を得ることができた．社会的意義は，高齢化が進む中，生活環境に応じた閉じこもり予防に対する社会的方策の示唆を得ることができたことである．看護専門職と地域社会が協働して高齢者の外出環境を整えることで，地域包括ケアシステムが目指す，高齢者の尊厳の保持と自立生活のための支援を受けながら，可能な限り住み慣れた地域で，自分らしい暮らしを続けるための知見につながる．

研究成果の概要（英文）：　The aim of this study is to verify the effect of climate on the self-efficacy scale among the elderly with the focus on their homebound tendency.
To measure the relationship between the climate the homeboundedness, the study randomly selected the elderly residents in cold snowy region. The study measured two causal factors for homeboundedness (frequency of outing and enjoyment of outing) and their relationship to the elderly self-efficacy scale. The reasons for high self-efficacy elderly for going out during the snowy season included “grocery shopping” “meeting with friends” and “exercise”. Interestingly, during non-snowy days, the only factor related to frequency of outing high self-efficacy group was “grocery shopping”. Enjoyment of outing was related positively only in snowy season. The elderly with high self-efficacy reported they enjoyed “regular medical check-ups” “visiting administrative or financial offices” “Community events” or “Cleaning up the snow”.

研究分野：老年看護学

キーワード：積雪寒冷地　高齢者　閉じこもり予防　外出

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

我が国では 2025 年には 65 歳以上の人口比率が 30%を超えることが見込まれ，介護・医療費等の社会保障費の急増が懸念されている．厚生労働省は，2025 年を目途に，地域包括ケアシステムの構築を推進している．このシステムは，高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで，可能な限り住み慣れた地域で，自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるようにするシステムである．このシステムの中で外出に焦点をあてた取り組みが，閉じこもり予防・支援である．閉じこもり予防・支援マニュアルによると，閉じこもりは，高齢化による体力の低下や疾病・障害などの「身体的要因」，活動意欲や生きがい感の低下などの「心理的要因」，社会的役割の減少や集団活動の不参加などの「社会・環境要因」が交互に関連して発生すると考えられている．

山崎ら（2010）が開発した「地域高齢者の外出に対する自己効力感を測定する尺度(self-efficacy scale on going out among community -dwelling elderly：以下 SEGE と略す)」は，閉じこもりの改善には外出に特化した自己効力感が潜在的に影響していることを想定し，それを測定する尺度である．SEGE は信頼性と妥当性が検証されており，この尺度を用いることで閉じこもり傾向にある高齢者のスクリーニングや，閉じこもり改善に関わる心理的側面の介入効果を把握することができるという点で有用である．

研究者は 2015 年度に，閉じこもり予防に焦点を当てた研究を，SEGE を用いて非積雪期の積雪寒冷地において実施した．SEGE は新しい尺度であるため，関東地域の調査報告があるが，積雪寒冷地を調査地域とした報告が見いだせなかったためである．その結果，積雪寒冷地在住高齢者の外出頻度と外出に対する自己効力感との関係は，非積雪期において中程度の正の相関があり，先行研究である関東地域の結果と同程度の結果であった．この結果から，SEGE が積雪寒冷地においても尺度として使用できること，積雪寒冷地でも非積雪期であれば，他の地域と同程度の結果であることが確認された．

そこで今回は，前回の研究成果を踏まえ，2015 年の研究では明らかにならなかった，「積雪」に伴う外出に対する自己効力感と閉じこもりに関係する要因を明らかにすることを目的とした．SEGE の他、外出の目的や頻度，さらに外出する際の支援の実態と必要性などについて，積雪期と非積雪期に調査を実施し，比較検討をする．

この研究の実施により，閉じこもり予防の観点から，積雪寒冷地在住高齢者が，住み慣れた地域で自分らしい暮らしを継続することができるよう支援するための知見につながると考えた．

２．研究の目的

本研究は，「積雪」に伴う外出に対する自己効力感と閉じこもりに関係する要因を明らかにすることを目的とした．外出に対する自己効力感の他，外出の目的や頻度，さらに外出する際の支援の実態と必要性などについて積雪期と非積雪期に調査を実施し，比較検討をする．この研究の実施により，閉じこもり予防の観点から，積雪寒冷地在住高齢者が，住み慣れた地域で自分らしい暮らしを継続することができるよう支援するための知見につながる．

３．研究の方法

(1)研究対象

北海道 A 市の住民基本台帳閲覧許可を得て，65 歳以上の 390 人を無作為抽出した．

(2)調査期間

積雪期（2018 年 1～2 月），非積雪期（2018 年 8～9 月）

(3)調査方法

積雪期，非積雪期それぞれに郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した．対象者は 2 時期とも同じであるが，紐づけせずに郵送した．

(4)調査項目

基本属性 3 項目（年齢／性別／同居者の有無）

外出目的 11 項目（日用品の買い物／受診／友人・知人と会う／役所・金融機関／デイサービス等／習い事・趣味の会／収入を伴う仕事／地域での役割／散歩・運動／除雪（積雪期のみ）／庭仕事（非積雪期のみ））のうち当てはまる項目について外出頻度（ほぼ毎日／週 3～4 回／週 1～2 回／月 1～2 回／月 1 回未満），外出に対する楽しみの程度（楽しみ／普通／楽しみではない）

SEGE を，開発者に許諾を得て使用した．SEGE 合計得点は 6 点から 24 点の範囲で，点数が高いほど自己効力感が高いことを示す尺度である．

外出時の支援について（必要としていない／十分に受けている／受けているが不十分／受けていないが必要）と自由記載欄を設けた．

(5)分析方法

記述統計を算出し，各項目と SEGE との間で有意差のある項目を確認した．分析には SPSS Statistics ver.25 を使用した．

４．研究成果

(1)積雪期

回収数は 143 部（回答率 36.7%）であり，そのうち回答に欠損のない 134 部を有効回答（有効回答率 34.4%）とし，分析対象とした．

対象者の年齢は 65 歳～96 歳の範囲で分布し，中央値は 73 歳であった．男性 61 人（45.5%）女性 73 人（54.5%）であった．独居 35 人（24.1%），同居者あり 99 人（73.9%）であった．SEGE 合計得点の四分位数は 17.0（14.0-19.0）であった．

基本属性と SEGE 合計得点との関係は表 1 の通りであり，年齢（p=.028）のみ有意差を認めた．

外出目的別の頻度と SEGE 合計得点との関係を Kruskal Wallis 検定で確認したところ，日用品の買い物（p=.006），友人・知人と会う（p=.049），デイサービス等（p=.022），散歩・運動（p=.017）で有意差を認めた．

外出目的別の楽しみの程度と SEGE 合計得点との関係を Kruskal Wallis 検定で確認したところ，受診（p=.043），役所・金融機関（p=.020），地域での役割（p=.004），除雪（p=.000）で有意差を認めた．

外出時の支援については，必要としていない 103 人（76.9%），十分に受けている 11 人（8.2%），受けているが不十分 6 人（4.5%），受けていないが必要 14 人（10.4%）であった．支援に関する自由記載では，除排雪に関すること 37 件，交通機関に関すること 20 件，道路に整備に関すること 15 件，身体的な不安に関すること 11 件，経済的なこと 8 件，人的支援に関すること 5 件，将来的な不安 6 件であった．

（表 1　積雪期の基本属性と SEGE 合計得点との関係）

		人数	SEGE 合計得点	p
年齢	前期高齢者	76	17.5（15.0-19.0）	.028*
	後期高齢者	58	16.0（12.0-18.0）	
性別	男性	61	18.0（14.0-19.0）	.212
	女性	73	16.0（14.0-18.0）	
同居者の有無	独居	35	17.0（14.0-19.0）	.994
	同居者あり	99	17.0（14.0-19.0）	

Mann-Whitney 検定，SEGE 合計得点の四分位数は 17.0（14.0-19.0），*：p＜.05

(2)非積雪期

回収数は 136 部（回答率 34.9%）であり，そのうち回答に欠損のない 134 部を有効回答（有効回答率 34.4%）とし，分析対象とした．

対象者の年齢は 65 歳～96 歳の範囲で分布し，中央値は 74 歳であった．男性 60 人（44.8%），女性 74 歳（55.2%）であった．独居 33 人（24.6%），同居者あり 101 人（75.4%）であった．SEGE 合計得点の四分位数は 17.0（14.0-18.0）であった．

基本属性と SEGE 合計得点との関係は表 2 の通りであり，年齢（p=.001）のみ有意差を認めた．

外出目的別の頻度と SEGE 合計得点との関係を Kruskal Wallis 検定で確認したところ，日用品の買い物（p=.001）のみ有意差を認めた．

外出目的別の楽しみの程度と SEGE 合計得点との関係を Kruskal Wallis 検定で確認したところ，有意差のある項目はなかった．

外出時の支援については，必要としていない 104 人（77.6%），十分に受けている 15 人（11.2%），受けているが不十分 4 人（3.0%），受けていないが必要 11 人（8.2%）であった．支援に関する自由記載では，交通機関に関すること 11 件，経済的なこと 6 件，道路や設備に関すること 5 件，身体的な不安に関すること 4 件，人的支援に関すること 3 件，将来的な不安 3 件であった．

（表 2　非積雪期の基本属性と SEGE 合計得点との関係）

		人数	SEGE 合計得点	p
年齢	前期高齢者	69	17.0（15.0-19.0）	.001**
	後期高齢者	65	16.0（12.0-18.0）	
性別	男性	60	17.0（15.0-19.0）	.097
	女性	74	16.0（13.0-18.0）	
同居者の有無	独居	33	17.0（14.0-18.0）	.682
	同居者あり	101	17.0（14.0-19.0）	

Mann-Whitney 検定，SEGE 合計得点の四分位数は 17.0（14.0-18.0），**：p＜.001

(3)積雪期と非積雪期との比較

①2 時期とも，回答者数・基本属性はほぼ同数であった．

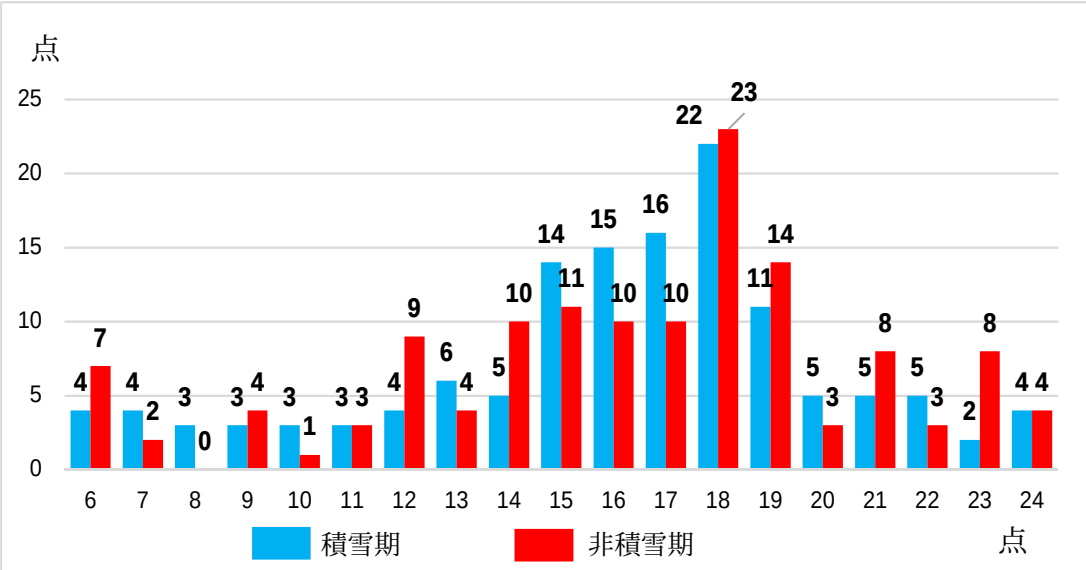
②SEGE 合計得点は，2 時期で中央値は同じ 17 点であった．

③基本属性と SEGE 合計得点との間で有意差を認めた項目は，2 時期とも年齢であった．

④外出目的別の頻度で SEGE 合計得点との関係で 2 時期とも有意差を認めた項目は，「日用品の買い物」であった．積雪期のみで有意差を認めた項目は，「友人・知人と会う」「デイサービス等」「散歩・運動」であった．

⑤外出目的別の楽しみの程度と SEGE 合計得点との関係で有意差を認めた項目は，積雪期のみであり，「受診」「役所・金融機関」「地域での役割」「除雪」であった．

⑥外出時の支援について，必要としていない人は 2 時期とも 77%前後であったが，不十分と感じている人は積雪期で 14.9%，非積雪期で 11.2%であった．必要と感じている支援は積雪期では除雪に関することが挙がっていた．2 時期共通では，交通機関や設備の整備・経済的支援・人的支援を必要としていた．また，身体的に不安を感じていることが示された．



（図 1　積雪期・非積雪期の SEGE 合計得点の比較）

今後の課題は，積雪寒冷地在住高齢者が閉じこもることなく外出できるために，外出に対する楽しみの詳細を明らかにすることと，身体的な不安を軽減するための方策，外出環境を整えるために必要なことを明らかにすることである．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　2 件）

（1）原田圭子，村松真澄：積雪期の在宅高齢者の外出に対する自己効力感と目的別の外出に対する楽しみの程度との関係，第 70 回北海道公衆衛生学会，2018 年 10 月 20 日，札幌市．

（2）原田圭子，村松真澄：積雪寒冷地在住高齢者の外出目的別楽しみの程度と外出に対する自己効力感との関係―積雪期と非積雪期の比較–，日本老年看護学会第 24 回学術集会，2019 年 6 月 7 日，仙台市．

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。